

久内清孝

Kiyotaka HISAUCHI (1884～1981)

1974年 2 月16日　亘理俊次撮影

久内清孝先生の霊に捧ぐ

東邦大学名誉教授，本誌編集員，久内清孝先生は４月12日に97歳の天寿を全うし逝去されました。先生は大正５年牧野富太郎先生が本誌を創刊されると，その第１巻から寄稿され，朝比奈泰彦先生が本誌を引継がれてからも編集員として協力され，多くの興味ある記事を書いて下さいました。本誌の発展のため多年にわたる先生の御尽力に対し，改めて深く感謝の意を表します。

先生は明治17年３月10日東京で生まれ，明治32年４月横浜英語学校を卒業されました。生来生物特に植物を愛好され，明治42年植物学の第一人者として有名だった牧野富太郎先生の門下に入り，横浜植物会のメンバーとして活躍され，鋭い観察力で続々興味ある植物を見出して牧野先生をおどろかせました。大正５年本誌が創刊されると，その第１号には久内先生の発見された新種 *Ligustrum Hisauchii* Makino が発表されました。また久内先生御自身も第１巻から寄稿され，自ら杜仲軒主人と号して「杜仲軒赭鞭夜話」を連載され，数多くの新知見がふくまれていました。また久内先生の採品に基ずいて，小泉源一先生は *Rubus laudabilis, Elaeagnus maritima* を記載され，中井猛之進先生は *Elaeagnus Hisauchii* を発表されました。大正７年には久内先生自ら *Chelonopsis Yagiharanus* を記載されました。先生は東京植物同好会の会員としても活躍され，大正12年からは東京大学薬学教室の朝比奈泰彦先生の門下に入り薬用植物について研究されました。この頃からの久内先生の活躍は誠に目覚しく，次々に新植物，新知見が報告されました。

先生は語学，特に英語に練達され，大正11年ジャパンタイムス横浜支店長をつとめられたこともありました。先生の読書力は驚嘆すべきもので，生物学・薬学関係のものは勿論，良書は端しから読破され，抜群の記憶力と理解力でその内容をとりいれられました。内外の故事にも精通され，その学識の広さと深さはとても常人の及ぶところではありませんでした。常に向学心に燃え，進んで新しいものを求めとりいれ，これを生かして行くとゆうきわめて進歩的で国際的な感覚の持ち主で，最後まで若々しく溌剌としておられました。外国から新しく入ってくる植物にも興味をもたれ，日本の帰化植物についても先駆的研究をされました。関東周辺の植物研究者は先生から何等かの教えをうけたといっても過言ではなく，この地域の注目すべき植物は先生と何等かのかかわりがありました。学問の細分化が進む今日，何を聞いても答えて下さった先生こそ，日本における真の博物学者の最後の御一人でありました。その偉大で慈父のような先生を失ったことは誠に哀惜に耐えません。先生の教えをうけた私共は先生の精神をうけついで，今後も本誌の発展のために一層の努力を続ける覚悟でおります。　　(原　寛)

Kiyotaka HISAUCHI (1884～1981)

Mr. Kiyotaka Hisauchi (Hisauti), Professor Emeritus of the Tōhō University and the senior member of the editorial board of this Journal, born on March 10, 1884 in Tokyo, has passed away on April 12, 1981 at the age of 97.

He was a born naturalist, and has been much interested in botany from his early years. His paper appeared from the first volume (1916) of this Journal, and since then he has contributed a series of interesting papers. He has actively botanized especially middle Honshu, and based on his specimens, T. Makino, T. Nakai, G. Koidzumi and others have described such new species as *Ligustrum Hisauchii* (1916), *Rubus laudabilis* (1917), *Elaeagnus Hisauchii* (1918), etc. Also he himself published new species as *Chelonopsis Yagiharanus* (1918), *Sanicula kaiensis* (1934), etc. in this Journal. During his long association with this Journal, he contributed much to knowledge of the flora of middle Honshu, including his pioneering studies on naturalized plants of Japan. His botanical specimens are mostly deposited in Department of Botany of University of Tokyo (TI). All Japanese botanists and pharmacognosists will remember Mr. Hisauchi for the surprisingly wide range of his interests, and his generous help given to all others. Japanese botany will really suffer a great loss with the death of Mr. Hisauchi. (Hiroshi HARA)

久内さんを悼む

４月21日の葬儀には遂に参列せずに終った。これは単に私の怠惰，薄情のせいのみではない。かつて南方熊楠氏が自宅のすぐそばで親しかった人の葬儀が営まれたにも拘らず，出席せずに終日自宅に籠って観音経を誦した故事に倣ったのである。私はその日，机によって終日故人を偲び，50年余の数々の思い出を綴った次第である。

机辺の縁側の前庭に椿の一品種である都鳥が２本育っている。高さ４ｍほどに育ち，毎年美事な白花をつける。これこそ十余年前に久内さんから載いた思い出の木である。既に花の盛りを過ぎたが，せめて咲き残りでもと思って探したが，黄ばんだ花片が樹下に散り敷かれてあるのみであった。私が刺のある木を集めていた時代がある。この際に久内さんは大変に協力して下さった。先づハリグワである。はじめに載いたものが大きく育ったころ，あれは雌木であったから雄木も上げようとのこと。この両株はどんどん増えて，いささか持て余し気味になった。次がジヤケツイバラである。これは庭の境界線に植えたが，外側にどんどん侵出し，隣りの心なき百姓に刈り取られて仕舞った。中国で昔から荆棘を分けるという言葉がある。その荆とは北支の荒野に多いクサニンジン

ボクのことで，土地の人はその小枝を網んで籠などをつくる話をしたことがある。久内さんはそれを聞いて，ではその木を上げようと言い，間もなく届けて下さった。この際にはナニワバラ，ウラジロメギなども添えて下さった。時々そのとげで手に傷が出来ることがあり，是も久内さんの心尽しと観念している。兎も角話題になる植物は殆んどすべて東邦植物園にあるのには感心する以上に驚いて仕舞った。久内さんはハーブ即ち香料植物にも関心を抱かれ，たしか明治屋で出している嗜好という雑誌に記事を書かれたと思うが，私もキウリのロシア漬け用にとウイキョウの苗を載いたことがある。その際にツルニチニチソウも載いた。いま可憐な紫紺の花をつけている。しかしあまり繁殖がよすぎて，時々刈り取っている。マルバマンネングサやオノマンネングサは地面に拡って居るし，一隅にはヒメウズが小さな白花を綴っている。その他まだ目につかぬ処に久内さんの心尽しの草々が育っていることであろう。　（小林義雄）

久内清孝氏を悼む

遂に久内清孝さんがなくなられた。御歳は97であったから我々一同にとってまことに珍らしい御高齢であったし，もう少しで 100 歳というのも夢ではなかった。まことに惜しい御歳であった。

久内さんと知り合ったのは大学に入ってからである。それ迄の御経歴についてはほとんど知らないし，また話されるのを嫌っておられたのでつい耳にすることなくすんでしまった。今にして思うともっと確かめて置くべきだったと惜しまれてならないが，それもむなしい。

土曜日になると部屋に音もなく入って来られる。口元にはきまって煙草が下がっていた。それが消えるともなくほのかに煙を立てていたのが今も目に浮ぶ。まことに至芸というのに等しかった。こうして淡々と，しかし深切に話がつづく。どんなことをおたずねしても何らかの言葉がかえって来る。それが我々一同にはまことに知識になり宝石であった。私にとっては Plantae Wilsonianae 一セットを下さったのもとり分けて有難いことであった。今もこれを書棚の見え易いところに置いている。それを見る度に頂戴した時の心のつながりがじーんと身に浸みてくるのである。

そんな久内さんでも，時には思いがけない反抗心というべきものがあった。戦争もたけなわな頃，警官が食糧品をやかましく取締っていた折，重たそうな袋をぶらさげて派出所の前をゆっくりと通る。てっきり米の袋と思い込んで呼びとめて調べると砂の袋だ。その時の久内さんの表情が思いやられる，というような事もあった。我々一同，慎しんで氏の姿を偲び，心からの哀悼の意を表するものである。　（前川文夫）

久内さんとシダ

久内さんは顕花といわず隠花といわずあらゆる植物に興味をもっておられ，シダもよく研究されていた。地理的な活動範囲は関東・中部などがおもで，とりわけ相州と武州

が重点であった。発表機関は「植研」がほとんどで，1巻2号（1916）の「横浜支那街に得たる楊桃」は牧野主筆を別とすれば全寄稿者の第1号であった。シダについては同巻7号（1917）の「相州箱根の二羊歯」が始まりで，滝坂道のオオクジャクシダと箱根権現社頭のアカハナワラビの二つが載っている。後者は武州膝折村で牧野先生が発見し同巻2号に新種として発表されたもので，「箱根は実に世界に於ける本羊歯第二の産地となる」という。さらに4巻5号に「アカハナワラビの新産地」の題で「余は本年(1927)之を武州秩父武甲山下の各処で採集した之が恐らく本邦第三の産地である」と報告された。

2巻2号（1918）には「豆州天城の植物」と題する興味深い記事がある。「大正6年8月11日伊豆狩野川上流の寒村湯ヶ島に宿し其日浄蓮ノ滝付近に遊ぶ（中略）浄蓮ノ滝は啻に滝其物既に羈人の杖ヲ停むるに足るのみならず更に赭鞭の徒として垂涎萬丈を禁ぜざらしむるものあり。先づ羊歯中近道稀に見るものを挙げんに牧野氏により始めて土佐に発見せられ宮沢文吾氏により湯ヶ島に藤井潔氏により同山中地蔵堂に見出せられ更に近く原虎之助氏により此瀑下に採集せられたるタキミシダ，児玉親輔氏により発表せられたるミゾシダモドキを筆頭にウラジロ，ホソバカナワラビ（中略，シダの名多数）然して此行余をして最も興味を感ぜしめたるものは滝付近のコモチシダ是れなり!」ここでみごとな写真入りでこのシダを詳しく紹介し「而して余は本品にハヒコモチシダの新和名を下せり其後牧野氏は余の採りし標本に基き其学名を *Woodwardia radicans* Sm. var. *unigemmata* Makino と定めらる（後略)」と書いておられる。なおこの新変種の発表は同号欧文欄に牧野先生によってなされている。ついでにハイコモチシダ（一名ジョウレンシダ）はその後中井猛之進博士によって種に引き上げられ *W. unigemmata* となり今日に至っている。

横浜は久内さんの最も関心の深かった地のようで，サイコクベニシダ・シノブ・ホウライシダなどの報告があるが，それで思い出すのはキジノオシダのことである。このシダは今はもう横浜のどこにも見つからないが東大理学部に久内さん採集の古い標本が保存されている。それには特製の久内個人用ラベルに横浜，根岸，善行寺池畔杉林中，Oct. 23. 1911 と書かれてあり，隣りに貼った東大のラベルには私の字で「当時僅かにこの株一株あっただけであると，又この産地並びに日付は決してインチキでない旨採集者は保証した。尚この池は埋立てとなって今は無い。21・II・1938 H. Ito」とあるのを見ると，昭和13年にはもう絶滅していることになる。このようにわからないことは万事久内さんに聞けば，ということになっていた。

10巻（1934）1号と4号に伊豆下田産のホシダの変り物についての報告がある。これは下部の1～2対の羽片がさらに羽状に切れたもので，多分田川基二氏のイヨホシダであろうとしているが，この型の葉と普通の葉とが同一地下茎から出ていることから，畸形ホシダとして論じ，意見を述べられた。

16巻4号（1940）の「デンジソウの観察」はこのシダを形態学的に非常に精密に研究し記録されたもので，多数の顕微鏡写真を入れてよくわかるテキストになっている。なお，17巻8号にはデンジソウの葉のことが載っている。

久内さんは東大へはよく標本を寄贈されたが，牧野標本館にはわずかに横浜，御殿場，相州神武寺の合計7点のシダが残っている。これは牧野先生とは絶えず交流があって，郵送して同定を求めることなどは滅多になかったためではないかと考えている。

（伊藤　洋）

久内清孝というお方

久内先生は私が真に先生と考えていた数少い方々の中の一人である。それにも関らず，学生時代以来，久内先生と呼んだことはなかった。30歳近くも先輩であり，植物学のみでなく広い範囲の教を受けた方を，さんづけで呼んでいたのは今から考えると極めて異常に思われる。しかし，これは私だけに限ったことではなくて，友人たちもみな同じであった。どうも先生と呼ぶのには，こちらの方に違和感があったばかりでなくて，そう呼ばれる時の先生の何かちぐはぐな表情にも原因があったような気がする。

先生は決してものを教えてやる態度でわれわれに臨まれたことはなかった。年上の友人と言ってはおこの限りであるが，暖かい人間として対等（?）に接しられた。先生はいつも各方面の最新の研究に熱い視線を向けていられた。それで，どんなに未熟者でも，そのものの研究は尊重された。そうであるから，若い研究者の学問的関心を敏感に察知されて，これを側方から援助されることができたのである。あの時はその場で，他の時は次にお会いする時に，そのものずばりの材料なり，トピックスを持って見えたのである。こういうことの重なりで若者の中に研究の芽を育てて楽んでいられるようにも見えた。

先生の研究態度は徹底した実証であり，それを支える広汎な文献の渉猟であった。いわゆるセオリーはあまり喜ばれなかったのではあるまいか。その広汎な学識のどの部分でも若者をひきつける力があった。それは全く強制を伴わずに，自然に誘導されるという風にである。私に関する一例を言えば，本草文献への接近は先生なしには考えられなかった。大学ではそういうものは教えないのが，当時の，そして多分現在でもの風潮である。本郷通りの古書肆へのぶらぶら歩きの楽しさは，今でも深い影を私の中に投げかけている。

ある時，木下杢太郎博士を訪問しないかと誘われた。私は博士の南蛮研究のことは存じ上げていたが，並々ならぬ植物愛好者であり画家であったことは知らなかった。本郷の閑邸で，短冊形のベトナムの植物の彩色写生図を拝見して，私は驚きと讃嘆にたえなかった。先生の広さが，このような文化人との交友の基になっていたのである。

先生は西欧の文物にも深い関心をもたれ，特に英国の習俗に傾倒していられた。私は横浜に長く住まれたからであろうと軽く考えていたのであったが，歿後にお聞きした所

によると，若い日に漱石の門に入られ，文学を志されたことがあるというので，初めてなるほどと分った。いつか「チャタレー夫人の恋人」に出てくる植物を抜きだして植物学的に解説された論文の原稿を拝見したことがあるが，私は正直にいって先生の本心が分らなかった。今にしてやっとこれが先生にとって必然のものであったことが分った次第である。まさに孤盲が象を撫でるの図である。（津山　尚）

杜仲軒の由来

杜仲軒は久内清孝先生の号である。杜仲とは長江中流各省産の落葉高木 *Eucommia ulmoides* Oliver（トチュウ科）のことである。樹皮の煎汁を強壮剤などに用いる。この号を使用され初めたのは古くて，大正初年頃（?），朝比奈泰彦博士，緒方正資氏などと山陰地方を旅行された時に，朝比奈博士の蕾軒にそろえて選ばれたものと聞いた。先生の論文にはしばしば杜仲軒主人としてある。数年前，先生は雲南省産の杜仲茶を入手され，その鑑定を津村研究所に依頼された。これは確かに杜仲茶であって，他のものも添加されていたことが分った。飲料としての効果を高めるためであろうか。附図の杜仲軒本店の署名は自からを茶舗の主と洒落れて私信に書かれたものである。（佐々木一郎）

久内さんをしのぶ

植物分類学の私の恩師は中井猛之進先生であり，亡くなる直前まで講義をして下さった早田文蔵先生であるが，先生とお呼びするより，もっと親しみをこめて，さん付けでお呼びしていた先生が3人おられる。それは牧野富太郎，伊藤篤太郎，久内清孝の3先生である。牧野先生からは大学で講義をお受けしたわけではなく，さまざまの御話をうかがったり，野外指導を受けたりしたのだが，先生の書かれるものを中学生時代から読んでいた私には先生というよりはもっと親しみのある方であった。伊藤篤太郎先生は私の父の友人で，私が植物学を専攻することを知られると，大へん喜ばれて，大学入学につけ卒業につけ，たえず御祝いの言葉をいただいた。そして大学に入ってから研究室でいつも御世話になったのが久内清孝先生であるが，もちろん久内さんとお呼びしていた。久内さんはいつも友達のように若い者とつきあわれ，先生などとよぼうものなら，それこそ怒り出されそうな気がする。

私がオトギリソウ科植物を専攻するというので，なにかにつけていろいろと親切にして下さり研究の完成を祈っておられるように感じたが，それは当時の研究員のだれしもが久内さんから感じることであったろう。久内さんは多くの立派な標本を無償でたえず植物学教室の標本室に入れておられた。

特に私が久内さんに感謝しなければならないのは日本の植物学史研究についてである。

久内さんは古くからの本草学者，日本植物学の先駆者たちに思いを致しておられ，私が日本の植物学史をしらべることを喜ばれ，貴重な書物を借して下さったり，私のつたない研究の成果をたいへん喜んで下さった。最近私は横浜を訪れたが，横浜は久内さんの土地のような気がした。モダンであって西洋文化の玄関口であったことがわかるとともに，古きよき日本の伝統を今も守っている感じがするのである。　　（木村陽二郎）

先　生

久内先生とはじめてお会い出来たのは昭和15年私が上野の東京科学博物館に勤めて間もなくだった。古いコートを着て至って体裁をかまわぬ痩せがたの“おっさん”がふらりと私の勤めている今関六也先生の部屋に入って来られて，いきなり植物の話しをはじめられた。時々するどい視線が走るけれども，柔和な眼で私にも蘚苔類関係の先輩たちのことを色々話してもらった。これは大変な人物にちがいないと感じた。

それ以来苔類の標本などをもらうようになった。或る時ツノゴケのツノが沢山出た標本をもって来られた。私はその場で顕微鏡をのぞき，“これはナガサキツノゴケです。胞子でわかります。葉状体に *Nostoc* の塊りがあります。”と答えたら，先生にやりと笑って“その方は別の物だろう”と言われた。ハッと気づいて再度検鏡すると，薄い葉状体で *Nostoc* がきれいに並んでいるシャクシゴケがたしかに相当量混生して，ひどく閉口した。

野外採集会にはよく来られて，その博学にユーモアをまじえた応答で熱心な会員たちの中心的存在だった。苔のこと以外は何にも判らぬ私は，何か質問されては大変と戦々恐々，何時も久内先生の背中に小さくなってくっつくようにしていた。先生にくっついていれば人々は先生に向って質問するので，私は難を免れることが出来，そして色々なことも覚えられるので一挙両得であった。

その頃先生はチェーン・スモーカーだった。採集の折はバットか何かの強い安煙草を上唇にくっつけておられた。質問に答えられるときは，煙草は上唇にくっつけたままで話された。これは便利な方法とばかり私も真似をしたが，口を開くと煙草が落ちてうまく行かなかった。

地獄耳とはこんな人の耳を言うのではないかと，先生の記憶力の凄さには何時も圧倒された。東邦大学の故額田理事長も久内先生にほれ込まれた１人で，同大学教授陣でも久内先生の扱いは別格だったと聞いている。時にはずばりと遠慮会釈のない意見を出される恐い先生で，私はひそかに“植物分類学界の大久保彦左衛門”なる仇名を奉った。

最後にお会いしたのは昭和53年千葉大学で開催された植物学会大会であった。95歳の高齢でステッキこつこつと１人で出て来られた。夜の分類学会総会にも出席され，予定が少し延びたので空腹になられたとみえ，配られた折詰を先にさっさと平らげられた。すき腹に食べすぎられたためか，気分が悪くなり，一寸休んでから帰ると言われた。気

分がよくなったばかりで，しかもこんなお年で夜8時頃大学から御自宅の道のりが心配で，私も一緒に帰りましょうとついて行った。電車にのられてから殆ど平常に戻られ，東京駅に着くと，私がまごついている間にエスカレーターなど要領よくすいすいとのってホームに出られた。この分では私などお宅迄ついて行っては却って御迷惑と考えて，お別れした。今となってはそのままお宅迄ついて行けばよかったとしきりに思われる。

(服部新佐)

久内先生と帰化植物

帰化植物というと，すぐに久内清孝先生の御労作“帰化植物（昭和25年；1950)”を想い出される方も多いと思う。当時，本書はこの分野の調査，研究を志す者にとって必読のもので，筆者も学生時代にこれを手にして以来，常に座右におき愛用してきた。

いうまでもなく帰化植物の調査，特に同定を行うにあたっては，我国自体の植物に関する知識のみならず，必然的にこれらに関連した文献，特に世界各地のフロラにも通暁することが必要である。

周知のように先生は，諸外国語のみならず古今の書に通じておられ，その該博な知識が本書の随所に盛込まれており，正に先生の面目躍如たるものがあるといってよい。

ところで先生に外来植物の同定をお願いしたような場合，かなり迅速にご返事がいただけたことから，一見同定がいとも簡単に行われたような印象を受けておられる方も，少なくないのでなかろうか。しかし，これは見かけ上のことであって，先生の同定に対する態度というか理念は，非常に慎重かつ厳密なものであった。この点については，筆者も既に触れておいたように（植研 55：29-32, 1980)，ただ単に文献（内外の）渉猟に止まらず，もし納得がいかなければ国内の専門家のみならず，場合によっては標本の一部を外国の専門学者に送って，意見を求められた。その際に披見可能な限り，関連外国標本とも対比され，正確を期されたのは言うまでもない。

また和名についても同様で，詳細に検討され，最も妥当と思われるものを採用される態度で終始されていた。

先生の外来（帰化）植物に関する知見の主なものは，ほとんど本誌上に公表されているが，その他関連誌上などにも随時見解を発表しておられた。たとえば国立科学博物館での講演内容をもとに，“帰化植物ということば”（自然科学と博物館20巻，5～6号，1953）をまとめておられる。これは帰化植物のニュアンスを欧米の諸文献をも引用しながら明確に述べると共に，これに対する外国での考え方や該当する用語などにも言及されていて，正に先生ならではの感が深い。

ところで一体，いつ頃から先生が帰化植物に取組まれたのか，となると詳かでないが，一般植物を扱っておられるうちに，必然的にこれらに関与されるようになった，と考えるのが妥当であろう。また，その一因として先生が長らく横浜に居住しておられ，しかも横浜植物会（故牧野富太郎先生を指導者として創設された我国で最も古い植物同好会。

先生は設立の当初から重要メンバーの1人として活躍され，逝去時には同会の顧問であられた）に関係されたことも，大きなファクターであったと思われる。

ご承知のように横浜は我国屈指の貿易港であり，この地から現在でも次々と異国の雑草が侵入している実状にある。

すなわち既に明治45年（1912）には，ヤセチャヒキやオオスズメノチャヒキなどといったイネ科のものを，ご自身で採集，同定されると共に，新和名をも公表しておられる。また大正3年から4年（1914～15）にかけては，横浜市の滝頭でセイヨウキンポーゲやイガヤグルマギクなどを採集，同定され，この和名を新称された。さらに大正11年(1922)には，同市内の西戸部町の畑地で牧野富太郎先生と共に，コハコベを始めて検出されている。次いで昭和4年（1929）には，ノハラヒジキ，エダウチチカラシバ，コネズミガヤ，イヌカキネガラシ，ノハラガラシなどといった新顔が相ついで横浜市内から先生によって発見，固定され，これらの所属と新和名とが報告された。また昭和6年(1931)には，ヒナキキョウソウ，カミツレモドキ，エゾスズシロモドキ，ミノボロモドキなどが，同市内の山手町や山下町から検出され，同定結果（経緯）と新和名とが披露されるに至っている。

勿論この他に，全国各地の採集家諸氏などから送付された標本を同定され，ご自身で新和名と共に公表されたものは枚挙にいとまがなく，第二次大戦前後に我国へ侵入した帰化植物の大部分に，先生が何んらかの形で関与されている，といっても決して過言ではなかろう。筆者自身も昭和26年（1951）頃，この分野の調査に志した当時，種々な密入国のニューフェイスを逮捕（?）（先生はこのような剽軽な表現がお好きであった）しては，先生に同定をお願いしたものである。

たとえばハナハコベ，マメアサガオ，ドクゼリモドキ，オニカラスノエンドウ，キダチキツネアザミ，トゲミゲシ，トゲミノウマゴヤシ，ウズマキウマゴヤシ，ツルヤブジラミなどの新和名は，当時筆者が公表したものであるが，それらの同定はいずれも先生をわずらわした。また，これと前後して横須賀市の長浦港付近から，佐野純雄氏により見出されたラシャナスやスズメノナギナタなどの異草も，先生の固定ならびに新和名である。

いずれにしても先生が，我国の帰化植物フロラの調査に果たされた御功績は偉大なものがある。なお，ここで特筆したいことは前述の筆者の例をみるまでもなく，新外来品の存在を先生がご自身で直接公表されるよりも，むしろ多くの方々を指導され，その示唆に従って発表されたものが多いことである。その著例が上述の佐野氏の場合で，よほど丁寧に報文を読まないと，同氏が同定し，新和名を創定したかのような印象を受けてしまう。これは恐らく発表に至るまで（佐野氏は植物学的面では専門家でなかったと考えるのが妥当である），内容はもとより文章自体も先生が手を加えられた結果に他ならないと思う。

この他にも，久内先生と帰化植物にまつわる想い出はつきないが，これらに関してはいずれ別途にまとめ，ご紹介したいと考えている。現在筆者が，まがいなりにも帰化雑草という難物への対処が出来るようになったのは，30年余りにも及ぶ先生の直接あるいは間接の御教導，御援助の賜であるといってよい。先生の御存命中に，その完成を心待ちにしておられた“日本帰化植物誌”をお目にかけることが出来なかったのは，本当に残念でならない。近い将来，先生の御霊の前に本書を捧げることを誓いつつ拙文を終ることとしたい。　(浅井康宏)

久内先生の想い出

私が植物採集を始めて間もなく，牧野図鑑など手近にみられる書物にない植物が久内先生の帰化植物（科学図書出版社）に載せられているのに感激し，木造兵舎のままであった習志野の東邦大学まで参上し，植物について教えていただいたことがあった。昭和25年頃中学時代のことであり，私は大きな影響を受けた。帰化植物の研究は久内先生の本意ではなかったらしく，植物に対する好奇心の一端であったようであるが，先生の学問の特徴を示す好例のように思われる。植物に対する興味だけではなく，広い知識をもったうえで，さらに広い範囲にわたって書物に目を通し，その要点を記憶していなければ，多くの帰化植物を正しく同定することは困難である。先生はそのような人であった。

主にマメ科であったが，久内先生にはときどき質問された。御自分で私の知る以上によく調べてから持ってこられるので閉口させられた。宿題となってしまったものもあり，お元気なうちに返事ができず，残念でならない。シナガワハギ・セイヨウエビラハギもその一つであったが，最近，両方を区別しないほうがよいと考えるようになったので，そうお返事したい。来週の土曜日位にはやはり違うところもあるよとお小言をいわれそうな気がする。　(大橋広好)

昆虫家久内さん

植物学者の久内さんを知ったのは大正時代，私がまだ小学生の時からであった。植物関係の会合などで高田の馬場の家に見えたことも多かった。東京植物同好会の採集会に，弟と捕虫網を持って父親にくっついて参加し，お世話になった記憶もある。

久内さんはその頃，本草家として知られた林業試験場昆虫部の矢野宗幹先生と親しかったらしく，矢野さんの名前が度々話に出た。又昆虫を主にした博物器材商の平山修次郎氏の渋谷の店にも私共をつれて行って下さった。

我が国に産する最も有名な昆虫の一つであるガロアムシの知識は，この虫が日本で発見された時代の頃には久内さんの活動に負う所が多い。大正の初期 1915/1916，フランス大使館の通訳官で昆虫採集家であったガロア氏 (Edme Gallois) は日本では最初にこの虫を日光中禅寺で捕えた。この類の昆虫は1914年，カナディアンロッキーで発見されたものをトロント大学の E.M. Walker 教授が記載した。それは *Grylloblatta cam-*

podeiformis と言い，新科・新属・新種で，後には新目を建てられるに至った。

当時日本には，横浜にアメリカ農務省昆虫局のマメコガネ研究班が来ており，その中の若い研究者キング氏（J.L. King）は，京城に総領事として勤務していたガロア氏に会ってこの虫を見せてもらった。彼は日本に戻って日光中禅寺に出かけるため久内さんをさそったが同行を断られている。久内さんはキング氏の上役のクローゼン博士（C.P. Clausen，昆虫天敵学者として有名，物故されたが，先年まで日本昆虫学会の名誉会員であった）とキング氏の噂話をしていたが，しかし彼キングは遂に1922年9月15日，中禅寺でこの虫を採って来て自慢して見せたという。彼は1924年，ワシントンの直翅学者A.N. Caudell と共著で，日本のガロアムシに *Galloisia nipponensis* と命名し，♂と幼虫の記載を行った。この属名はホモニムの故を以て後に *Galloisiana* と訂正された。

久内さんは1926年4月3日，たまたま武州高尾山でカラステンナンショウを堀った際にこの虫を発見，手づかみした所逃げられてしまった。翌年旧制武蔵高校の学生であった山本篤（後の高官）氏と共に同じ場所に赴き，遂にガロアムシを捕えたのである。これらのいきさつは，当時矢野先生が編集しておられた東京昆虫学会の機関誌「昆虫」1巻2号 132-134（1926）に，「ガロアムシ（新称）」矢野宗幹という記事で詳しい。

これを起点とするガロアムシブームは暫くつづき，高尾山の棲息地へは山本篤氏の案内で，湯浅八郎・内田享・江崎悌三などの大家も訪れている。中学生の私もここから採って来た幼虫を飼ってその記事を書いた（昆虫　3(3)：195. 1929)。

このあたりまでの事柄は「採集と飼育」2巻2号，48-50（1940）の久内さんの記事「ガロアムシ採集の昔話」に詳しく，その後の多くの日本の昆虫学者の関心をそそる問題に進展して行った。

ガロアムシは其の後，ほとんど日本全国，北海道から九州までの各地で少しづつとれ，私は1959，1969年に2・3の新種を命名したことがあるが，分類学的にも実に難かしい昆虫の一つであって，恐らく原始的な直翅系昆虫の特殊化した1群と見るべく，今日なお系統的位置の定め難いものである。日本のその後の材料は大部分，私の手許にあったが，現在それらは国立科学博物館の山崎柄根君に托してある。

同じ頃「昆虫」誌上に私の名でギンイチモンジセセリとルリエンマムシが採集された短報がでている（3(2)，132，1929)。これは私の処女論文のようにもなっているが，実は私の話をもとに久内さんが代って投稿されたもので，久内さんがルリエンマムシにも興味を持っておられた事実は，同じ「昆虫」2(2)，p. 136（1927）の矢野先生の記事の中に出ている。

この頃からずっと後々まで，植物研究雑誌の編集会が毎月父親の書斎で催されていたので，久内さんにお会いする機会は多かった。英国の甲虫の本を贈って下さったこともあり，マメコガネの天敵研究の人達の論文の別刷もいくつかいただいた。

日支事変中の1938年，久内さんは神武寺で地衣上に生活している奇妙なアリジゴク型

の昆虫を発見された。終戦後になってこの虫の生きたのをいくつか私に下さった。これは石垣などに生じた不完全地衣上にとまって，体に地衣の粉芽をまとい，一種の擬態を示しているもので，飼育の結果，それまで未知であったコマダラウスバカゲロウの幼虫であることが判った。これは一般のアリジゴクのようにスリバチ型の穴を掘ることのない一種に入る（動雑，57(3)，p. 35. 1947)。これが機縁になってこの幼虫は其の後，日本の各地で発見されるようになった。

久内さんの憶い出話は，特に昆虫に限らずまだいろいろあって尽きないが，私共虫好きの小学生が遂にプロの虫屋になってしまった過程には久内さんの存在も大きかったと思わざるを得ないのである。　（朝比奈正二郎）

久内清孝先生の思い出

畏友，東邦大学名誉教授久内清孝先生は去る4月12日97才のご高齢で他界されたが，先生の日頃のご健康からすれば100才の天寿を全うされるであろうと祈念していたのに，まことに痛惜のきわみである。

先生と私とは牧野富太郎先生が主宰された東京植物同好会や植物研究雑誌の編集同人として60年来の交友であり，とりわけ私には津村研究所時代の交友がなつかしい。

1924年（大正13年）秋，先代津村重舎先生（当時津村順天堂主，貴族院議員）に迎えられて，まず津村薬用植物園を設営中だった私は，たまたま来園された久内先生が標本園のアマチャの立札を見て，これはサワアジサイであると注意された。実はその前年に私が伊豆・天城山で採集してきたもので，サワアジサイに似ているが葉に甘味があるので仮にアマチャとしていたが，葉の形などに問題があった。そこでその後牧野先生のお伴をして天城山に問題のアマチャを採集し，ご研究をお願した結果アマチャの一新変種アマギアマチャ *Hydrangea serrata* Seringe var. *amagiensis* Makino と命名し発表された。久内先生の注意によりアマギアマチャ発見の裏話である。

さて周知のように牧野先生の植物研究雑誌は関東大震災や経済事情のため2巻6号以来久しく休刊されていたので，私は津村研究所に出版部を設け復刊することを企図し，まず久内先生に，次で朝比奈先生や牧野先生にご相談し，ご賛同を得て1926年（大正15年）1月第3巻1号から復刊したが，とりわけ久内先生には編集同人の人選などで並ならぬお世話になった。今や56巻5号（1956年5月現在）となり，通巻639号に達しているが，久内先生は亡くなる2—3ヶ月前まで毎月の編集会に出席されており，そのご熱意には感謝に堪えないものがある。

久内先生の博学は植物研究雑誌に連載された杜仲軒豬鞭夜話でも有名であるが，植物分類学の生字引でもあり，私はとりわけ1928年8月丹沢地震の直後の丹沢山（神奈川県）に植物採集に同行して深い印象を受けた一人である。

先生今や亡し，玆に謹んでご冥福をお祈り申し上げる。　（木村雄四郎）

久内先生と地衣

昭和25年４月と云えば，「資源植物事典」が発行されて間もない頃であった。事典編集当時の名残とかいうことで，金曜日には編集に当られた先生方が，資源科学研究所の籾山泰一先生の研究室にお集まりになることが恒例となっていた。その中の１人の先生が久内先生であった。

顕花植物専門の先生だから，地衣のことはあまり御存知あるまいと思っていたのに，それがとんでもない見当違いであることが間もなくわかってきた。それもそのはずで，昭和12年の朝比奈先生の南アルプス仙水峠への地衣採集行は久内先生の御世話によるものであり，久内先生御自身も同行されたことが「朝比奈泰彦伝」に明記してあるし，ほかにも数回朝比奈先生と採集行をともにされて，実地で地衣を勉強された筋金入りの知識をおもちであったのである。

なお，余談かもしれないが，「資源植物事典」は，柴田桂太，久内清孝両先生を頂点とする，博識多才な執筆者陣によってはじめて可能となった名著であり，私達あるいはそれ以下の年代のものには全く期待できないような，充実した内容のある著書であると云えよう。

久内先生はまた「植物のなかのどのグループのものかわからないものに出くわしたら，それは地衣ですと返事をしておけばよいのだ」ということを口にされていた。この言葉にはいろんな意味が含まれていたようである。「地衣類というのは，それだけ分類の困難な厄介な植物群だよ」という意味と「地衣学者はもっともらしい理屈をつけて地衣の分類をしているが，一般の植物学者はちっとも理解できないのだから，地衣だと云っておけばそれでわかったような気持になり，さらに追及する人もないよ」という警告めいた意味もあったように思われる。

先生は植物がお好きであったことはもちろんであるが，おそらく植物を研究する人間の方をも暖かい気持で見守っておられ，時には助言を，時には警告を，また時には激励の言葉を下さったに違いない。上の言葉についての解釈も，実は大変甘い見方であって，久内先生のことだから「そんな変りものの地衣などを，まじめに研究しているお前の方こそえらい変り者だよ。へへへッ。」という痛烈な皮肉と茶目ッ気がこめられていたのかもしれない。

(黒川　逍)